

巻頭言：言葉で伝える、そしてその先

秋田英語英文学会会長 佐々木 雅子

英語の授業を参観する機会が毎年数回あります。より「よい」授業実践のための改善点を探る検討会も同時に開催されます。毎回参観させていただく度に、授業者の先生がどれだけの労力と時間と情熱をかけて実践して下さったのだろうと想像し、頭が下がります。渾身の授業であればあるほど、その思いは強くなります。検討会での私の役割は、授業で観察したことをもとに、理論的に言われていることと自身の経験を総動員して、指導助言という名のコメントを述べることですが、見た目や想像以上にきついものです。気力体力勝負です。

スポーツをしている時の感覚と似ています。スピードのある動きの中で即断即決を要求されるからです。45分～50分の授業後その日の内に（早い場合は10分程度の休憩後）検討会が始まります。授業の課題（問題）と思われる最重要ポイントを見つけ出し、その課題解決となる改善方法の提案まで漕ぎつけることができるかどうか！、時間的余裕のない時は心拍数が高まり、アドレナリンが放出しているなど自覚します。「佐々木先生からコメントです。」という司会者の言葉が終わるぎりぎり0.1秒前まで考え抜くことを何回も経験してきました。平静を装いながら（見破られていると思いますが）、実に冷や汗ものです。

検討会后いつも、自分自身が「よい」と思って述べたコメントについて内省する時間がやってきます。私が主観的によいと思って判断したことが、不十分な観察に基づいていなかったか、授業者の準備や意図を正確に把握し解釈しきれていたのか、生徒や授業時間帯などのコンテキストが異なればどうだったのか。また、「よい」授業の定義が異なる場合、1時間程度の時間でのやり取りは相互理解までたどり着けているのか等々。

それでも最終的には言葉にしたことについては責任を持ち後悔しないようにしています。進歩の速度は速く、新たな真実が解明されていく速度も速くなっている中で、常に謙虚に向き合ってさえいれば何とかかなるという覚悟のような心持ちです。各授業者の先生たちが、私の言葉を機会にして、同感でも反対でも、何かをつかんでほしいと願うばかりです。

秋田英語英文学会においても、引き続き熱のこもった論文や実践報告が発表されることを期待しています。言葉は年齢とともに伸びる数少ない能力だと言われているようです。言葉を交わし、言葉の先に未来を描いていけるような人々が集まる学会としてあり続けられたらと思います。